

## 夏目漱石研究

——「洋燈」と「電燈」の役割を巡って——

前 田 友 美

夏目漱石作品において、「洋燈」が意識的に用いられていることについては、既に高橋英夫氏の次のような指摘がある。

洋燈こそ暗い闇の中に点じられて、一点の周囲に層々と押し及ぼされてゆく仄めく明りの波を生むものだった。この形象に深くかわわっていた質は、たんなる「明」などではありえず、文字通り「明暗」というものだった。そう見てゆくことが可能ならば、「洋燈」は漱石問題という輪廓さだかならぬ一領域に差し出された一つの明かりたりうるのだ。<sup>(註1)</sup>

本論文では、『三四郎』『それから』『門』『行人』『心』『道草』『明暗』の「洋燈」「電燈」の例をそれぞれに考察し、最後に漱石作品全体における「洋燈」「電燈」の役割について考察していきたい。

『三四郎』においては、光を灯す道具が効果的な使われ方をしている。

①「燈台は奇抜だな。ぢや野々宮宗八さんを画いて入らしつたんですね」

「何故」

「野々宮さんは外国ぢや光つてるが、日本ぢや真暗だから。——誰もまるで知らない。それで僅ばかりの月給を貰つて、穴倉へ立籠つて、——実に割に合はない商売だ。野々宮さんの顔を見る度に気の毒になつて堪らない」(四)

②「君なぞは自分の坐つてゐる周囲方二尺位の所をぼんやり照らす丈だから、丸行燈の様なものだ」(四)

③「何にもない。時々論文を書く事はあるが、ちつとも反響がない。あれぢや駄目だ。丸で世間が知らないんだから仕様がな。先生、僕の事を丸行燈だといつたが、夫子自身は偉大な暗闇だ」(四)

④美禰子も留つた。三四郎を見た。然し其眼は此時に限つて何物をも訴へてゐなかつた。丸で高い木を眺める様な眼であつた。三四郎は心の裡で、火の消えた洋燈を見る心持がした。元の所に立ちすくんでゐる。美禰子も動かない。

(六)

⑤三四郎は念の爲め、邪魔ぢやないかと尋ねて見た。些とも邪魔にはならないさうである。女は言葉で邪魔を否定した許ではない。顔では寧ろ何故そんな事を質問するかと驚いてゐる。三四郎は店先の瓦斯の光で、女の黒い眼のなかに、其驚きを認めたと思つた。事実としては、たゞ大きく黒く見えた許である。(九)

①の野々宮さんは燈台として、②の与次郎は丸行燈として、③の広田先生は偉大なる暗闇として、④の美禰子は火の消えた洋燈として、⑤のよし子は、瓦斯燈として、登場人物がそれぞれ個々の、様々な明りを灯す道具として喩えられてゐることがわかる。その中で広田先生だけは、灯りではなく、暗闇として表現されている。この広田先生の暗闇は、『三四郎』という作品の中で、非常に重要な役割を果たしていると考えられるが、また考えていきたい。主人公である三四郎が、なぜ灯りに喩えられていないのかということについても、今後考えていく必要があると思われる。

続いて、『それから』の「洋燈」の用例を見ていきたい。用例は本論文の末尾に示した表のようになっている。

『それから』において、「洋燈」の用例は、むしろ、点けられていない場面の方が印象に残る。①の用例で、三千代は「暗

い」中に現れて、代助に挨拶する。はつきりと見えない三千代の姿を、想像力も手伝って、何時もよりも美しいと代助は感じる。代助と三千代は、「洋燈も点けないで、暗い室を閉て切つた儘二人で坐つてゐた」とある。「洋燈」の点いた明るい空間よりも、「暗闇」(十六)の中で、一緒に居る方が、二人には自然であるように思われる。三千代の夫である平岡も、下女も不在の時であり、二人だけで、世の中から切り離された空間に座っている場面である。これはのちに、代助と三千代が「自然の昔」(十四)に帰ろうとする、次に挙げる場面にも繋がる描写であるとも考えられる。雨は依然として、長く、密に、物に音を立て、降つた。二人は雨の為に、雨の持ち来す音の為に、世間から切り離された。同じ家に住む門野からも婆さんからも切り離された。二人は孤立の儘、白百合の香の中に封じ込められた。(十四)

⑥の用例は、代助が三千代と一緒にすることを決め、父に強いられていた佐川の娘との縁談を断る決意をした場面であり、その結果父からの援助は断ち切られることとなる。⑦⑧⑨に見られる「十六」では、代助は「洋燈」をつけずに、自分をわざと暗闇の中において、そこには居ない、三千代のことを想像し、思い遣っている。三千代の姿を想像している代助の描写が、『それから』には多く見られる。二人が二人で向き合うためには、「洋燈」の灯の行き渡る空間ではなく、「暗闇」の中でなくてはならない。それは、重態に陥る三千代と、家族からの援助を完全に断ち切られ、職業を探しに奔走する代助の、最後の場面における二人の未来を暗示する「暗闇」であるとも考えられる。

次に「門」についての考察に移る。「門」における「洋燈」の用例は末尾に示した表のようになっていた。

『門』において「洋燈」は、夫婦の間になくはならない「灯り」として用いられていることが、⑤の例から読み取れる。⑭の例は御米と初めて出会った直後の宗助だが、その頃には、宗助は「洋燈」の灯を吹き消して寝ていたことがわかる。⑯の「夫婦は夜中燈火を点けて置く習慣が付いてゐる」という習慣は二人が一緒になってから身についたもので

あることがわかる。宗助と御米の距離は「洋燈」を間に置いて、限りなく近いものとして描かれているが、⑫⑬の用例において、御米が宗助に、自分に子供が出来ないという告白をする場面が描かれており、「細い洋燈の灯」が夫婦の間に不吉なものを象徴しているとも考えられる。⑮以降において、宗助の状況は変わってくる。⑮の例の後、宗助は、坂井によって、安井が近くまで迫ってきていることを知らされるのである。⑯⑰の用例には、「洋燈」を通して、宗助が周りのものが何一つ変わってはならず、自分だけが変わってしまったことを思い知らされる様子が描かれている。宗助は安井の接近してきている事実を御米に伝えることができず、一人苦しむ。田中祐子氏は、『門』における「洋燈」の役割について次のように述べられている。

実生活の上で洋燈は照明器具として、明るさを提供する役割のもとに用いられるものである。そこに漱石は、「暗」との対照だけでなく同化を見出し、作品中に深く意味付けようとしたのではないだろうか。状況如何によって変化していく姿を見せるもの、それが洋燈であり、又人間の姿であるということを感じさせるのである。<sup>(注1)</sup>

田中氏の指摘されるように、「洋燈」は、宗助と御米になくしてはならない「灯り」であるとともに、安井を傷つけた過去の罪を共有して生きていくという「暗」の部分の照らし出していると考えられる。寧ろ、「洋燈」の光の届かない「暗」の部分が印象に残るように描かれているのではないだろうか。

その一方で、⑱における「例の如く洋燈が暗くして床の間に載せてあつた」という記述から、二人の間に本当の亀裂が生じたことばかりを暗示するものではないとも考えられる。<sup>(注2)</sup>⑱と同じ場面に次のような描写がある。

凡てが恐ろしい魔の支配する夢であつた。七時過に彼ははつとして、此夢から覚めた。御米が何時もの通り微笑して枕元に曲んでゐた。冴えた日は黒い世の中を疾に何処かへ追い遣つてゐた。(十七)

「洋燈」が変わらず野中家にあるのと同じように、御米も「何時もの通り」微笑している。この後宗助は山門に入

る事を決意する。

二

次に『行人』の考察に移る。『行人』にも、数多くの灯りを点す道具が効果的に使用されている。末尾の表を参考にさせていただきたい。

「帰つてから」において、暴風雨によって、二郎と直がやむを得ず和歌山の宿に泊まる夜に、灯りは非常に効果的に使用されている。①において、直は大胆にも闇の中で、何時の間にか着物を着替えていて二郎を驚かせ、また、②においても同様に、何時の間にか化粧を施しており、ぱつと明るくなった途端に、視覚的な鮮やかさを伴って、二郎をはっとさせる。⑤においては直が、薄暗い行燈の照らす中で、自分は死ぬことを忘れたことがない、と心の内を二郎に告白している。電燈が照らすような明るい空間ではなく、薄暗い中であつたからこそ、直は二郎に告白できたのではないだろうか。『行人』における「電燈」の光は明るく、同時に闇の暗さを際立たせていると考えられる。⑪において二郎は、皆の居る電燈に照らされた明るい部屋に行くことが出来ず、暗い所に佇んでいる。最初は無関心であつた一郎の苦悩に次第に気付いていき、一郎の不安が乗り移ってしまったような二郎の姿が現されている場面であると考えられる。また⑫の用例において、「濃い夜陰の色の中にあつた一つ懸け離れて星のやうに光つてゐる」(「塵勞」四十九)「電燈」の光は、ピアノの音が聴こえる洋館から洩れているものであり、その「電燈」に明るく照らされた部屋から流れ続けるピアノの音は、近代人としての一郎の自我の表れとして、表現されていると考えられる。

次に「心」の「洋燈」の考察に移る。

①奥さんはおやくくと云つて、仕切りの襖を細目に開けました。洋燈の光がKの机から斜にほんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きてゐたものと見えます。(下 三十八)

②其時Kはもう寝たのかと聞きました。Kは何時でも遅く迄起きてゐる男でした。私は黒い影法師のやうなKに向つて、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、たゞもう寝たか、まだ起きてゐるかと思つて、便所に行つた序に聞いて見た丈だと答へました。Kは洋燈の灯を背中に受けてゐるので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の声は不断よりも却て落ち付いてゐた位でした。

Kはやがて開けた襖をびたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇に帰りました。(下 四十三)

③私は枕元から吹込む寒い風で不図眼を覚したので。見ると、何時も立て切であるKと私の室との仕切の襖が、此間の晩と同じ位開てゐます。けれども此間のやうに、Kの黒い姿は其処には立つてゐません。私は暗示を受けた人のやうに、床の上に肘を突いて起き上りながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く点つてゐるのです。それで床も敷いてあるのです。然し掛蒲団は跳返されたやうに裾の方に重なり合つてゐるのです。さうしてK自身は向ふむきに突つ伏してゐるのです。(下 四十八)

④私はおいと云つて声を掛けました。然し何の答もありません。おい何うかしたのかと私は又Kを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際迄行きました。其所から彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻して見ました。(下 四十八)

⑤私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙を開けました。其時Kの洋燈に油が尽きたと見えて、室の中は殆ど真暗でした。私は引き返して自分の洋燈を手を持った儘、入口に立つて奥さんを顧みました。

(下 五十一)

『心』における「洋燈」は、①のように、先生から見えるKの様子を照らし出す役割を果たしている。しかし②においては、「洋燈」はKの表情を先生に伝える役目を果たしていない。すでに自殺の決意をしていたと考えられるこの時のKの「顔色や眼つき」が、「洋燈」の逆光のため、先生には「全く分」らなかつたのである。③④はKの死の状態を、暗い「洋燈」の光が次第に明らかにしていく。そして⑤の用例において、Kが命を絶つたあとに、「Kの洋燈に油が尽きた」という表現のあることから、Kの命の灯が尽きたことを「洋燈」の油が尽きたことによつて象徴していると考えられる。

『心』の中には、「洋燈」に代わる言葉として「電燈」という言葉も見られる。先生の下宿時代には「洋燈」が主流であつたが、静と夫婦となり、「私」と出会う「上」においては、「電燈」が主流となつていく。次に用例を挙げていく。①書齋には洋机と椅子の他に沢山の書物が美しい背革を並べて、硝子越しに電燈の光で照らされてゐた。(上 十六)  
②食卓は約束通り座敷の縁近くに招ゑられてあつた。模様織り出された厚い糊の硬い卓布が美しく且清らかに電燈の光を射返してゐた。(上 三十二)

③私は先生の宅と此木庵とを、以前から心のうちで、離す事の出来ないもの、やうに、一所に記憶してゐた。私が偶然其樹の前に立つて、再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思ひを馳せた時、今迄格子の間から射してゐた玄関の電燈がふつと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へ這入たらしかつた。私は一人暗い表へ出た。(上 三十五)

「電燈」という言葉が登場するのは、この三場面であり、①の用例の「電燈の光」は、沢山の書物を照らしており、先生が知識人であることを印象づける役割を果たしていると考えられる。②の用例は、先生が純白のものを好むという性質をあらわす場面であると考えられる。特に③の先生夫婦の家の玄関の「電燈」が消えるという場面に注目したい。③は「私」が帰郷をする直前に先生宅にやつて来て、挨拶をして帰る所であるが、「私」が帰郷している間に、先

生は自殺をするので、「私」が先生に会うのはこれが最後となる。「再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思ひを馳せた時、今迄格子の間から射してゐた玄関の電燈がふつと消えた」とあることから、二度と、「私」が先生に会う機会がないということを暗示するとともに、先生の命の灯が尽きてしまうことを暗示しているとも考えられる。<sup>(注4)</sup>「洋燈」の⑤の例に挙げた、Kの死を尽きた「洋燈」の油が象徴していることと共通した使われ方であるとも考えられ、Kと先生の、逃れられぬ死に向かう運命を、「洋燈」と「電燈」が照らしていたと考えられる。先生がKの命の象徴とも言える「洋燈」の油が尽きるのを見て、時代が下り今度は「私」が、先生の命を表す「電燈」の光が消えるのを見るという、時の流れを超越したような、K、先生、「私」のそれぞれの関係性についても非常に意味の深いことであると考えられる。

続いて、『道草』の「洋燈」の用例を見ていきたい。末尾の表をもとに考察を行う。

高橋英夫氏は、『道草』の「洋燈」について、「そのほとんどはこれまでの作品に描かれた情景のヴァリエーションにすぎぬ、と見えるし、とくに新しい意味を認められない」と<sup>(注5)</sup>とされているが、『道草』において「洋燈」はやはり新しい意味を持つていると考えたい。仲秀和氏は『道草』の②の例について次のように述べられている。

健三の中に「神の眼」という視点がともされる。彼らを照らす洋燈が、彼に「神の眼」を導入させる役割を果たしたとは云えないだろうか。これ以後、彼は少し変わる。姉を見て、教育を除けば自分と大した変わりはないと思う。自分の方が不人情ではないかと自問し、姉が義理立てするのを馬鹿にしていたが、自分も同じことをやっていると反省する。健三自身の中に、自分と他者とを平等に見つめる視点ができたゆえ、かく考えるようになるのである。が、その視点はあらわれては又消え、普段の我執に満ちた健三にもどる。鳥田のいじった洋燈が赤い火で一杯になり、螺旋を逆に回しすぎかえって暗くなつてしまったように、「神の眼」の所在も見失つてしまふ



のである。<sup>(注6)</sup>

また、仲氏は⑤の例について次のように延べられている。

「夫婦は例の通り洋燈の下に寄った。広い世の中で、自分達の坐っている所丈が明るく思はれた。……」(『門』五)と描かれる宗助夫婦のようなむつまじさを感じないであろうか。「洋燈」を「あかり」とルビをふる。人々の営為を温かく照らす洋燈なのである。あるいは、島田の帰つた後、健三は御住の寝ている寢室に入る。そして立つたまま彼女を見下す彼は、すぐ「枕元に腰を卸」(五十)す。彼は妻の額に自分の手をのせ、冷してやろうかという。「大丈夫かい」「本当に大丈夫かい」(同)と妻の身を氣遣う。御住は「貴夫ももう御休みなさい」(同)と夫の身を氣遣う。普段の対立と確執ばかりつづけている夫婦には見られない、二人の温かさがあらわれるところである。この時も、寢室の「客間よりも暗」(同)い洋燈は、二人に灯を投げかけていたのである。「洋燈」は登場人物たちを温かく照らし、彼等を温かく描く語り手の視点に重なっていくのである。<sup>(注7)</sup>

『道草』における「洋燈」の灯は、暗く、静かである。⑥の用例では、「死のやうに静かな光」が、御住の出産する室内を照らしている。また「洋燈」とは直接関係がないが、「記憶の探照燈」(四)という言葉で、姉夫婦に対する健三の子供の時の思い出も照らし出されることもある。仲氏の指摘されるように、『道草』における「洋燈」は、登場人物を照らします。⑤の場面における「ひゅうく」と樹木の鳴るなかに、夫婦は静かな洋燈を間に置いて、しばらく森と坐つてゐた」という描写は、仲氏の言われるような「温かさ」よりも、その穏やかな静けさに注目したいと思う。『門』の宗助と御米の夫婦においては明らかとなっていた、「洋燈」を間にはさんだ夫婦の遣り取りが、この『道草』の⑤の場面では描かれていない。「夫婦は静かな洋燈を間に置いて、しばらく森と坐つてゐた」だけでは口論が主である健三と御住の間に訪れたわずかな静寂の中身に言及することはせず、作者は静かに見守っている。『門』

においては「洋燈」は、宗助夫婦の絆や関係の変化を照らし出すものとして用いられているが、『道草』においては、健三夫婦だけに留まらず、島田の老いた姿など、他の登場人物の姿や人間関係を客観的に、同じ距離から照らし出す役割を果たしているという点で、『門』とは異なる役割を果たしていると言うことが考えられる。

最後に、未完となった『明暗』の「電燈」の用例を考察する。末尾の表を見ると、『明暗』において「洋燈」はすでに姿を消しており、大正五年当時の時代背景を鑑みると、家庭において「電燈」が普及し、すでに「洋燈」に代わる働きをしていたことがわかる。当時はそれまで街灯などでは、すでに「電燈」は使用されていたと考えられるが、一般の家庭に「電燈」が初めて点つた時の、隅々まであらゆるものまでも照らし出す圧倒的な明るさは、それまでのほのぼのとした「洋燈」の光とはまるで異なつた驚きと新しさを人々に与えたのではないだろうか。

『明暗』において、「電燈」は非常に巧みに場面ごとに使われており、「明」と「暗」をほとんど同時に、鮮やかに照らし出していると考えられる。「電燈」のぱつと明るい光の一瞬間ののち、一転して闇となる場面が多く見られるのである。⑫の用例からは、津田の妻であるお延もまた、「電燈」の光に照らされている姿が津田の印象に残っていることが読み取れる。そして津田は⑬において、かつての恋人であつた清子を照らし出す「幾点の電燈」の一つを「運命の宿火」と呼んでいる。津田は、「電燈」の「其光の一つが、今清子の姿を照らしてゐるのかも知れない」(百七十二)と考えたが、⑭の用例において、再会した清子の姿を、その言葉通りに、印象的に「電燈」が照らし出していることがわかる。しかし次の瞬間その光は消え、清子は去り、津田は暗闇の中に取り残される。津田が「運命の宿火」と呼んだ「電燈」の灯は、このようにあつてなく消え去つてしまい、その先の運命を明らかに照らし出すことはしていない。

『明暗』において、光と闇は「電燈」がぱつと点いて、また消えることによって、登場人物の明暗の切り替わりが

鮮やかに照らし出されている。その効果は「洋燈」のように、点けるのに時間のかかる道具ではなく、スイッチひとつで点けられる「電燈」ならでは、舞台装置にあると言えるのではないだろうか。

### 三

『それから』では「洋燈」を点けない暗さが代助と三千代を近づけ、また同時に二人の波乱に満ちた未来を暗示していると考えられる。『門』では「洋燈」の光は宗助と御米にとって、生命とも言える灯を表し、またその光の届かない間は、二人を追い立てる社会と二人の罪の証である安井の影を象徴している。『心』ではKと先生の命の灯を、「洋燈」の灯が尽きたことと「電燈」がふっと消えたことで表されていると言える。『道草』では「洋燈」の暗く静かな光が作品を彩り、主人公健三と様々な他者との関係を照らし出している。『明暗』はまさにその題が示すように、「明」と「暗」が非常に意識された作品であると言える。『明暗』だけでなく、それまでの漱石作品の中でも「明」と「暗」は非常に意識して描かれてきたことが理解される。その問題は『三四郎』から『明暗』へかけて次第に高まっているように感じられる。最後の作品となった『明暗』にはそれまでの作品の集大成とも言える、人の心の明暗が、生々しく描き出されている。

『三四郎』から『明暗』まで、「洋燈」と「電燈」の用例を考察してきたが、そこに見られる「洋燈」から「電燈」への移行は、ただの時代の変化によるものだけでなく、漱石作品においては、「電燈」は、「洋燈」の照らし続けてきた「明」と「暗」の存在を一気に焦点化させるべく登場した道具であるといえるのではないだろうか。

『それから』

①平岡の玄関の沓脱には女の穿く重ね草履が脱ぎ棄て、あつた。格子を開けると、奥の方から三千代が裾を鳴らして出て来た。其時上り口の二畳は殆んど暗かつた。三千代は其暗い中に坐つて挨拶をした。始めは誰が来たのか、よく分らなかつたらしかつたが、代助の声を聞くや否や、何方かと思つたら……と寧ろ低い声で云つた。代助は判然見えない三千代の姿を、常よりは美しく眺めた。

平岡は不在であつた。それを聞いた時、代助は話してゐ易い様な、又話してゐ悪い様な変な気がした。けれども三千代の方は常の通り落ち付いてゐた。洋燈も点けないで、暗い室を開て切つた儘二人で坐つてゐた。(八)

②縁側から外を窺うと、奇麗な空が、高い色を失ひかけて、隣の梧桐の一際濃く見える上に、薄い月が出てゐた。

そこへ門野が大きな洋燈を持つて這入つて来た。(十一)

③「またお出掛ですか。よござんす。洋燈は私が付けますから。——小母さんが先刻から腹が痛いつて寝たんですが、何大した事はないでせう。御緩り」(十二)

④代助は竹早町へ上つて、それを向ふへ突き抜けて、二三町行くと、平岡と云ふ軒燈のすぐ前へ来た。格子の外から声を掛ると、洋燈を持つて下女が出た。が平岡は夫婦とも留守であつた。(十一)

⑤平岡の家の近所へ来ると、暗い人影が蝙蝠の如く静かに其所、此所に動いた。粗末な板塀の隙間から、洋燈の灯が往来へ映つた。三千代は其光の下で新聞を読んでゐた。今頃新聞を読むのかと聞いたら、二返目だと答へた。(十二)

⑥彼は眼を開けて時々蚊帳の外に置いてある洋燈を眺めた。夜中に襟寸を擦つて烟草を吹かした。寝返りを何遍も打つた。固より寝苦しいほど暑い晩ではなかつた。雨がまたざあ／＼降つた。代助は此雨の音で寝付くかと思ふと、又雨の音で不意に眼を覺ました。夜は半醒半睡のうちに明け離れた。(十五)

⑦代助は其晩わざと兩戸を引かずに寝た。無用心と云ふ恐れが彼の頭には全く無かつた。彼は洋燈を消して、蚊帳の中に独り寝転びながら、暗い所から暗い空を透かして 見た。(十六)

⑧門野を出した後で、代助は縁側に出て、椅子に腰を掛けた。門野の帰つた時は、洋燈を吹き消して、暗い中に凝としてゐた。(十六)

⑨二人の間答は夫で絶えた。門野は暗い廊下を引き返して、自分の部屋へ這入つた。静かに聞いてみると、しばらくして、洋燈の蓋をホヤに打つける音がした。門野は灯火あかりを点けたと見えた。

代助は夜の中に猶凝としてゐた。凝としてゐながら、胸がわく／＼した。握つてゐる肘掛に、手から膏が出た。代助はまた手を鳴らして門野を呼び出した。門野のほんやりした白地が又廊下のはづれに現はれた。

⑩代助は始めて洋燈を書齋に入れさして、其下で、状袋の封を切つた。手紙は梅子から自分に宛てたかなり長いものであつた。(一五)

⑪代助は洋燈の前にある封筒を、猶つくぐと眺めた。古い寿命が又一ヶ月延びた。晩かれ早かれ、自己を新たにする必要のある代助には、嫂の志は有難いにもせよ、却つて気の毒になる許であつた。たゞ平岡と事を決する前は、麴麴のために働らく事を肯はぬ心を持つてゐたから、嫂の贈物が、此際糧食としてことに彼には貴とかつた。

其晩も蚊帳へ這入る前にふつと、洋燈を消した。(一六)

### 「門」

①「其代り小六さん、憚り様。座敷の戸を開てて、洋燈を点けて頂戴。今私も清も手が放せない所だから」と依頼んだ。小六は簡単に、「はあ」と云つて立ち上がった。(一)

②「姉さん、ランプの心を剪る鉄はどこにあるんですか」と云ふ小六の声がする。(二)

③宗助と小六が手拭を下げて、風呂から帰つて来た時は、座敷の真中に真四角な食卓を据えて、御米の手料理が手際よく其上に並べてあつた。手焙の火も出掛よりは濃い色に燃えてゐた。洋燈も明るかつた。(三)

④夫婦は毎朝露の光る頃起きて、美しい日を甕の上に見た。夜は煤竹の台を着けた洋燈の両側に、長い影を描いて坐つてゐた。(四)

⑤夫婦は例の通り洋燈の下に寄つた。広い世の中で、自分たちの坐つてゐる所丈が明るく思はれた。さうして来明るい灯影に、宗助は御米丈を、御米はまた宗助丈を意識して、洋燈の力の届かない暗い社会は忘れてゐた。彼らは毎晩かう暮らして行く裡に、自分たちの生命を見出してゐたのである。(一五)

⑥夫婦は夜中燈火を点けて置く習慣が付いてゐるので、寝る時はいつでも心を細目にして洋燈を此所へ上げた。(七)

⑦御米は気にするように枕の位置を動かした。さうして其度に、下にしてゐる方の肩の骨を、蒲団の上で滑らした。仕舞には腹這になつた儘、両腕を突いて、しばらく夫の方を眺めてゐた。夫から起き上つて、夜具の裾に掛けてあつた不斷着を、寝巻の上へ羽織つたなり、床の間の洋燈を取り上げた。(七)

⑧御米は火の氣のない真中に、少時佇ずんでゐたが、やがて右手に当る下女部屋の戸を、音のしない様にそつと引いて、中へ洋燈の火を翳した。下女は綺も色も判然映らない夜具の中に、土竜の如く塊まつて寝てゐた。今度は左側の六畳を覗いた。がらんとして淋しい中に、例の鏡台が置いてあつて、鏡の表が夜中丈に凄く眼に応へた。(七)

⑨そのうち清が下女部屋の戸を開けて廁へ起きた模様だつたが、やがて茶の間へ来て時計を見てゐるらしかつた。此時床の間に置いた洋燈の油が減つて、短かい心に届かなくなつたので、御米の寝てゐる所は真暗になつてゐた。其所へ清の手にした灯火の影が、襖の間から射し込んだ。(七)

「まだ暗闇ですな。洋燈を点けますか」と聞いた。代助は洋燈を断つて、もう一度、三千代の病氣を尋ねた。(十六)

⑩御米が床へ這入つてから、約二十分許の間、宗助は耳の傍に鉄瓶の音を聞きながら、静な夜を丸心の洋燈に照らしてゐた。(十一)

⑪小六が薬取りに行つた間に、御米は、

「もう何時」と云ひながら、枕元の宗助を見上げた。宵とは違つて頬から血が退いて、洋燈に照らされた所が、ことに蒼白く映つた。宗助は黒い毛の乱れた所為だらうと思つて、わざ／＼鬢の毛を掻き上げて遣つた。(十一)

⑫「私は実に貴方に御氣の毒で」と切なさうに言訳を半分して、又それなり黙つて仕舞つた。洋燈は何時もの様に床の間の上に据ゑてあつた。御米は灯に背いてゐたから、宗助には顔の表情が判然分らなかつたけれども、其声は多少涙でうるんでゐるよう思はれた。今迄仰向いて天井を見てゐた彼は、すぐ妻の方へ向き直つた。さうして薄暗い影になつた御米の顔を凝と眺めた。御米も暗い中から凝と宗助を見てゐた。(十三)

⑬御米の宗助に打ち明けないで、今迄過したといふのは、此易者の判断であつた。宗助は床の間に乗せた細い洋燈の灯が、夜の中に沈んで行きさうな静かな晩に、始めて御米の口から其話を聞いたとき、流石に好い氣味はしなかつた。(十三)

⑭宗助は此臆断を許すべき余地が、安井と御米の間に充分存在し得るだらう位に考へて、寐ながら可笑しく思つた。しかも其臆

断に、腹の中で徊する事の馬鹿々々しいのに気が付いて、消し忘れた洋燈を漸くふつと吹き消した。(十四)

⑮それから二三日して、たしか七日の夕方に、また例の坂井の下女が来て、もし御閑なら何うぞ御話にと、丁寧に主人の命を伝へた。宗助と御米は洋燈を点けて丁度晩食を始めた所であつた。(十六)

⑯漸く家へ辿り着いた時、彼は例の様な御米と、例の様な小六と、それから例の様な茶の間と座敷と洋燈と筆筒を見て、自分丈が例にない状態の下に、此四五時間を暮してゐたのだといふ自覚を深くした。(十七)

⑰宗助は夫なり話を切り上げて寝た。頭の中をざわ／＼何か通つた。時々眼を開けて見ると、例の如く洋燈が暗くして床の間に上に乗せてあつた。御米はさも心地好ささうに眠つてゐた。つい此間迄は、自分の方が好く寝られて、御米は幾晩も睡眠の不足に悩まされたのであつた。宗助は眼を閉ぢながら、明らかに次の間の時計の音を聞かなければならない今の自分を更に心苦しく感じた。(十七)

『行人』

①「姉さんもう少しだから我慢しなさい。今に女中が灯を持つて来るでせうから」

(中略)

そのうち彼女の坐つてゐる見当で女帯の擦れる音がした。

「姉さん何かしてゐるんですか」と聞いた。

「ええ」

「何をしてゐるんですか」と再び聞いた。

「先刻下女が浴衣を持つて来たから、着換えやうと思つて、今帯を解いてゐるところです」と嫂が答えた。

自分が暗闇で帯の音を聞いているうちに、下女は古風な蠟燭を点けて縁側伝いに持つて来た。そうしてそれを座敷の床の横にある机の上に立てた。蠟燭の焰がちらちら右左へ揺れるので、黒い柱や煤けた天井は勿論、灯の勢の及ぶ限りは、穏かならぬ薄暗い光にどよめいて、自分の心を淋しく焦立たせた。殊更床に掛けた軸と、その前に活けてある花とが、気味の悪いほど目立つて、蠟燭の灯の影響を受けた。(兄)三十五)

②自分は手拭いを持つて、また汗を流しに風呂へ行つた。風呂は怪しげなカンテラで照らされてゐた。(「兄」三十五)

③飯の出る前に、何の拍子か、先に暗くなつた電燈がまた一時に明るくなつた。その時台所の方でわあと喜びの関の声を挙げたものがあつた。暴風雨で魚がないと下女が言訳をいつたにかかわらず、われわれの膳の上は明かであつた。

「まるで生返つたやうね」と嫂がいつた。

すると電燈がまたぱつと消えた。自分は急に箸を消えた処に留めたぎり、しばらく動かさなかつた。

「おやおや」

下女は大きな声をして朋輩の名を呼びながら燈火あかりを求めた。自分は電気燈がぱつと明るくなつた瞬間に嫂が、何時の間にか薄く化粧を施したという艶かしい事実を見て取つた。電燈の消えた今、その顔だけが真暗なうちに故の通り残つてゐるやうな氣がしてならなかつた。

「姉さん何時御粧したんです」

「あら厭だ真蘭になつてから、そんな事をいひだして。貴方何時見たの」(「兄」三十六)

④蚊帳の外には蠟燭の代りに下女が床を延べた時、行燈を置いて行つた。その行燈がまた古風な陰気なもので、一層吹き消して闇がりにした方が微かな光に照らされる不氣味さよりはかえつて心持が好い位だつた。(「兄」三十六)

⑤「姉さんが死ぬなんて事をいい出したのは今夜始めてです」

「ええ口へ出したのは今夜が初めてかも知れなくつてよ。けれども死ぬ事は、死ぬ事だけはどうしたつて心の中で忘れた日はありやしないわ。だから嘘だと思ふなら、和歌の浦まで伴れて行つて頂戴。きつと浪の中へ飛込んで死んで見せるから」

薄暗い行燈の下で、暴風雨の音の間にこの言葉を聞いた自分は、實際物凄かつた。(「兄」三十八)

⑥「姉さんは今夜よつほどどうかしてゐる。何か昂奮してゐる事でもあるんですか」

自分は彼女の涙を見る事が出来なかつた。また彼女の泣き声を聞く事も出来なかつた。けれども今にも其処に至りさうな氣があるので、暗い行燈の光を頼りに、蚊帳の中を覗いて見た。彼女は赤い蒲団を一枚重ねてその上に縁を取つた白麻の掛蒲団を胸の所まで行儀よく掛けてゐた。自分が暗い灯でその姿を覗き込んだ時、彼女は枕を動かして自分の方を見た。

「あなた昂奮昂奮つて、よく仰しやるけれども妾や貴方よりいくら落付いてるか解りやしないわ。何時でも覺悟が出来てるんで



- 「すもの」
- 自分は何と云うべき言葉も持たなかつた。黙つて二本目の敷島を暗い灯影で吸い出した。「兄」三十八)
- ⑧「直も芳江も今湯に這入つて居るやうだから、誰も上がつて来やしない。其んなにそわ／＼しないで緩くり話すが好い、電燈でも点けて」
- 自分は立ち上がつて、室の内を明るくした。夫から、兄の吹かしてある葉巻を一本取つて火を点けた。「帰つてから」二十六)
- ⑨其晩三沢の二階に案内された自分は、気楽さうに胡坐をかいた彼の姿を見て羨ましい心持がした。彼の室は明るい電燈と、暖かい火鉢で、初冬の寒さから全然隔離されてゐるやうに見えた。「帰つてから」三十)
- ⑩自分は電燈で照された彼の室を見廻して、其壁を隙間なく飾つてゐる風雅なエツチングや水彩画などに就て、しばらく彼と話し合つた。けれども何ういふものか、芸術上の議論は十分経つか減たないうちに自然に消えて仕舞つた。すると三沢は突然自分に向つて、「時に君の兄さんだがね」と云ひ出した。「帰つてから」三十)
- ⑪次の間は電燈で明るく照されてゐた。父が芳江に何か云つて調戲ふたびに、皆なの笑ふ声が陽気に聞こえた。すると突然其笑ひ声の間から、「おい二郎、又御母さんに小遣でも強請つてるんだらう。お綱、お前見たやうに、さう無闇に二郎の口車に乗つちや不可ないよ」と大きな声で云つた。
- 「い、え其んな事ぢやありません」と自分も大きな声で負けずに答へた。
- 「ぢや何だい、そんな暗い所で、こそく御母さんを取つ捉まへて話して居るのは。おい早く光るい所へ面を出せ」
- 父が斯う云つた時、明るい室の方に集まつたものは、一度にどつと笑つた。自分は母から聞き度い事も聞かずに、父の命令通り、はいと云つて、皆なの前へ姿をあらはした。「帰つてから」三十二)
- ⑫向ふの高い所に微かな燈火が一つ眼に入りました。昼間見ると、其見当に赤い色の建物か樹の間隙に眺められますから、此燈火も大方其赤い洋館の主が点けてゐるのでせう。濃い夜陰の色の中にたつた一つ懸け離れて星のやうに光つてゐるのです。私の顔を其燈火の方を向いてゐました。兄さんは又浪の来る海をまともに受けて立ちました。
- 其時二人の頭の上で、ピアノの音が不意に起りました。其処は砂浜から一間の高さに、石垣を規則正しく積み上げた一構で、庭から浜へぢかに通へるためでせう、石垣の端には階段が筋違に庭先迄刻み上げてありました。私は其石段を上りました。

庭には家を洩れる電燈の光が、線のやうに落ちてあまりました。其弱い光で照されてゐた地面は一体の芝生でした。花もあちこちに咲いてゐるやうでしたが、是は暗い上に広い庭なので、判然とは分りませんでした。ピアノの音は正面に見える洋館の、明るく照された一室から出るやうでした。(「塵勞」四十九)

『道草』

①電氣燈のまだ戸毎に点されない頃だつたので、客間には例もの通り暗い洋燈が点いてゐた。其洋燈は細長い竹の台の上に油壺を嵌め込むやうに拵えたもので、鼓の胴の恰形に似た平たい底が畳へ据わるやうに出来てゐた。

健三が客間へ出た時、島田はそれを自分の手元に引き寄せて心を出したり引つ込ましたりしながら灯火あかりの具合を眺めてゐた。彼は改まつた挨拶もせず、「少し油煙がたまる様ですね」と云つた。成程火屋が薄黒く燻ぶつてゐた。丸心の切方が平に行かない所を、無闇に灯を高くすると、斯んな変調を来すのが、此洋燈の特徴であつた。(四十八)

②「彼は斯うして老いた」

島田の一生を煎じ詰めたやうな一句を眼の前に味はつた健三は、自分は果して何うして老ゆるのだらうかと考へた。彼は神といふ言葉が嫌であつた。然し其時の彼の心にはたしかに神といふ言葉が出た。さうして、若し其神が神の眼で自分の一生を通して見たならば、此強欲な老人の一生と大した変りはないかも知れないといふ氣が強くした。

其時島田は洋燈の螺旋を急に廻したと見えて、細長い火屋の中が、赤い火で一杯になつた。それに驚ろいた彼は、又螺旋を逆に廻し過ぎたらしく、今度はたゞでさへ暗い灯火あかりを猶の事暗くした。

「何うも何処か調子が狂つてますね」

健三は手を敲いて下女に新しい洋燈を持つて来させた。(四十八)

③健三はすぐ奥へ来て細君の枕元に立つた。

「何うかしたのか」

細君は眼を開けて天井を見た。健三は蒲団の横からまた其眼を見下した。

襖の影に置かれた洋燈の灯は客間のよりも暗かつた。細君の眸が何処に向つて注がれてゐるのか能く分らない位暗かつた。

(五十)

④時計はもう一時過ぎてゐた。洋燈を消して暗闇を縁側伝ひに廊下へ出ると、突当りの奥の間の障子二枚丈が灯に映つて明るかつた。(五十一)

⑤夜は何時の間にやら全くの冬に変化してゐた。細い燈火の影を凝と見詰めてゐると、灯は動かないで風の音丈が烈しく兩戸に當つた。ひゆうくくと樹木の鳴るなかに、夫婦は静かな洋燈を間に置いて、しばらく森と坐つてゐた。(七十二)

⑥「確かりしろ」

すぐ立つて蒲団の裾の方に廻つた健三は何うして好い分らなかつた。其時例の洋燈は細長い火蓋の中で、死のやうに静かな光を薄暗く室内に投げた。健三の眼を落してゐる辺は、夜具の縞柄さへ判明しないほんやりした陰で一面に裏まれてゐた。

彼は狼狽した。けれども洋燈を移して其所を輝すのは、男子の見るべからざるものを強ひて見るやうな心持がして気が引けた。彼は已を得ず暗中に摸索した。(八十一)

『明暗』

①「おいお延」

彼は襖越しに細君の名を呼びながら、すぐ唐紙を空けて茶の間の入り口に立つた。すると長火鉢の傍に坐つてゐる彼女の前に、何時の間にか取り上げられた美しく帯と着物の色が忽ち彼の眼に映つた。暗い玄関から急に明るい電燈の点いた室を覗いた彼の眼にそれが常よりも際立つて華麗に見えた時、彼は一寸立ち留まつて細君の顔を派出やかな模様とを等分に見較べた。(六)

②「これ何うかしませうか」

彼女は金の入つた厚い帯の端を手を取つて、夫の眼に映るやうに、電燈の光に翳した。津田には其意味が一寸呑み込めなかつた。「何うかするつて、何うするんだい」(八)

③厳めしい表玄関の戸は何時もの通り締まつてゐた。津田は其上半部に透し彫のやうに嵌め込まれた厚い格子の中を何気なく覗いた。中には大きな花崗岩の沓脱が静かに横たはつてゐた。それから天井の真中から蒼黒い色をした鍔物の電燈笠が下がつてゐた。(十)

④ 其時二人の頭の上に下つてゐる電燈がぱつと点いた。先刻取次に出た書生がそつと室の中へ入つて来て、音のしないやうにブラインドを御ろして、又無言の儘出て行つた。(十二)

⑤ 冷たさうに擦つく肌合の七宝製の花瓶、其花瓶の滑らかな表面に流れる華麗な模様の色、卓上に運ばれた銀きせの丸盆、同じ色の角砂糖入と牛乳入、蒼黒い地の中に茶の唐草模様を浮かした重さうな窓掛、三隅に金箔を置いた裝飾用のアルバム、——斯ういふもの、強い刺戟が、既に明るい電燈の下を去つて、暗い戸外へ出た彼の眼の中を不秩序に往來した。(十三)

⑥ 津田は逃れるやうに暗い室を出た。彼が急いで靴を穿いて、擦硝子張の大きな扉を内側へ引いた時、今まで真暗に見えた控室にぱつと電燈が点いた。(十七)

⑦ 「さうだよ此上病氣にでも罹つた日にや何うにも斯うにも遣り切れないからね」

薄暗くなつた室の中で、叔父の顔が一番薄暗く見えた。津田は立つて電燈のスイッチを振つた。(二十八)

⑧ 夕方以後の彼は、寧ろお延の面影を心に置きながら外で暮してゐた。其薄ら寒い外から帰つて来た彼は、丁度暖かい家庭の燈火を慕つて、それを目標に足を運んだのと一般であつた。

(中略)

用のある時丈使ふ事にしてある玄關先の電燈のスイッチを振る音が明らかに聞こえた。(三十八)

⑨ 「処女であつた頃、自分にもかつて斯んなお嬢さんらしい時期があつたらうか」

幸か不幸か彼女は其時期を思い出す事が出来なかつた。平生継子を標準に置かないで、何とも思わずに暮してゐた彼女は、今其従妹と肩を並べながら、賑やかな電燈で明るく照らされた廊下の上に立つて、また曾て感じた事のない一種の哀愁に打たれた。(五十一)

⑩ 下女は格子の音を聞いても出て来なかつた。茶の間には電燈が明るく輝やいてゐる丈で、鉄瓶さえ何時ものやうに快い音を立てなかつた。今朝見たと何の変わりもない室の中を、彼女は今朝と違つた眼で見廻した。薄ら寒い感じが心細い気分を抱擁し始めた。その瞬間が過ぎて、たゞの淋しさが不安の念に変わりかけた時、歓楽に疲れた身体を、長火鉢の前に投げ掛けやうとした彼女は、突然勝手口の方を向いて「時、時」と下女の名前を呼んだ。(五十七)

⑪ 二畳敷の真中に縫物をひろげて、その上に他愛なく突ツ伏してゐたお時は、急に顔を上た。さうしてお延を見るや否や、いき

なり「はい」という返事を判然して立ち上つた。それと共に、針仕事のため、わざと低目にした電燈の笠へ、崩れかかつた束髪の頭を打つけたので、あらぬ方へ波をうつた電球が、猶の事彼女を狼狽させた。

お延は笑いもしなかつた。此る気にもならなかつた。斯んな場合に自分ならという彼我の比較にさへ胸に浮かばなかつた。今の彼女には寝ぼけたお時でさへ、其所にゐて呉れるのが、頼母しかつた。(五十七)

⑫「一体嫂さんは何ういふ積であらつしやるんでせう。こんだの事に就いて」

「お延に何にも関係なんかありやしないぢやないか。あいつにや何にも話しやしないんだもの」

「さう。ぢや嫂さんが一番氣楽で可いわね」

お秀は皮肉な微笑を見せた。津田の頭には、芝居に行く前の晩、これを質にでも入れようかと云つて、ぴか／＼する厚い帯を電燈の光に差し突けたお延の姿が、鮮かに見えた。(九十五)

⑬二人の後には壁があつた。生憎横側に窓がついてゐないので、強い光が何処からも射さなかつた。所へ南から来た自動車が大なる音を立て、四つ角を曲らうとした。其時二人は自動車の前側に装置してある巨大な燈光を満身に浴びて立つた。津田は始て青年の容貌を明かに認める事が出来た。蒼白い血色は、帽子の下から左右に垂れてゐる、幾ヶ月となく刈り込まない髭々たる髪の毛と共に、彼の視覚を冒した。彼は自動車の過ぎ去ると同時に踵を回らした。さうして二人の立つてゐる舗道を避ける様に、わざと反対の方向へ歩き出した。

彼には何の目的もなかつた。はなやかに電燈で照らされた店を一軒ごとに見て歩く興味は、たゞ都会的で美しくいといふ丈に過ぎなかつた。(百五十五)

⑭竊とも夜の色とも片付かないもの、にほんやり描き出された町の様は丸で寂寞たる夢であつた。自分の四辺にちら／＼する弱い電燈の光と、その光の届かない先に横はる大きな闇の姿を見較べた時の津田には慥かに夢といふ感じが起つた。(百七十一)

⑮眼に入る低い軒、近頃砂利を敷いたらしい狭い道路、貧しい電燈の影、傾むきか、つた葦屋根、黄色い幌を下した一頭立の馬車、——新とも旧とも片の付けられない此一塊の配合を、猶の事夢らしく粧つてゐる肌寒と夜寒と暗闇、——すべて朦朧たる事実から受ける此感じは、自分が此所まで運んで来た宿命の象徴ぢやないだらうか。今迄も夢、今も夢、是から先も夢、その夢を抱いてまた東京へ帰つて行く。(百七十二)

⑯御者は馬の轡を取つたなり、白い泡を岩角に吹き散して鳴りながら流れる早瀬の上に架け渡した橋の上をそろ／＼通つた。すると幾点の電燈がすぐ津田の眸に映つたので、彼は忽ちもう来たなと思つた。或は其光の一つが、今清子の姿を照らしてゐるのかも知れないとさへ考へた。

「運命の宿火だ。それを目標に辿りつくより外に途はない」(百七十一)

⑰電燈で照らされた廊下は明るかつた。何方の方角でも行かうとすれば勝手に行かれた。けれども人の足音は何処にも聴えなかつた。(百七十五)

⑱あたりは静かであつた。臍に向つた時下女の云つた通りであつた。といふよりも事實は彼女の言葉を一々首肯つて、大方この位だらうと暗に想像したよりも遙かに静かであつた。客が何処にあるのかと怪しむどころではなく、人が何処にあるのかと疑いたくなる位であつた。其静かさのうちに電燈は隈なく照り渡つた。けれども是はたゞ光る丈で、音もしなければ、動きもしなかつた。(百七十五)

⑲清子の身体が硬くなると共に、顔の筋肉も硬くなつた。さうして両方の頬と額の色が見るうちに蒼白く變つて行つた。其変化があり／＼と分つて来た中頃で、自分を忘れてゐた津田は氣が付いた。

「何うかしなければ不可い。何処迄蒼くなるか分らない」

津田は思ひ切つて声を掛けやうとした。すると其途端に清子の方が動いた。くるりと後を向いた彼女は止まらなかつた。津田を階下に残した儘、廊下を元へ引き返したと思ふと、今迄明らかに彼女を照らしてゐた二階の上り口の電燈がぱつと消えた。津田は暗闇の中で開けるらしい障子の音を又聴いた。(百七十六)

注

注 1 高橋英夫「洋燈の孤影―照らされた漱石世界」

(高橋英夫著「洋燈の孤影 漱石を読む」 幻戯書房

平 18・7

171頁)

注 2 田中祐子「夏目漱石『門』研究―「明」と「暗」の視点から―

(広島女学院大学国語国文学誌) 第24号 広島女学院大学 平 4・12

77頁)

注 3 田中祐子氏は「夫婦間に存在する過去により、彼等は強固に結び付けられており、その過去に常に脅かされ、そうあるこ

とで夫婦は存在し生きていく。のみならず、絶えざる脅かしにさらされ生活することで彼等は変化を免れず、断絶が生じることになった。社会から隔絶された彼等は、二人だけの閉じられた世界を形成しなければならなかったため、そこに夫婦の愛を見ようとしているが、断絶があるという事実において、彼等はそれぞれに孤独である」(注2に同じ。81頁)と述べておられる。

注4 先生の家が「燈火」という言葉で表現されている場面を次に挙げる。明治天皇崩御の報知で世の中が不安に揺れている場面である。

私の想像は日本一の大きな都が、何んなに暗いなかで何んなに動いてゐるだらうかの画面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ始末のつかなくなつた都会の、不安でざわ／＼してゐるなかに、一点の燈火の如くに先生の家を見た。私はその時此燈火が音のしない渦の中に、自然と捲き込まれてゐる事に気が付かなかつた。しばらくすれば、其灯も亦ふつと消えてしまふべき運命を、眼の前に控へてゐるのだとは、固より気が付かなかつた。(中五)

この場面における「燈火」もまた「電燈」と同じく、先生の、または先生夫婦の命の灯が絶えてしまうことに繋がる表現であると考えられる。

注5 注1に同じ

200頁)

注6 仲秀和「『道草』論―「意味」「洋燈」「温かさ」―

(仲秀和著 『漱石―「夢十夜」以後―』 和泉書院

平13・3

192頁～193頁)  
193頁～194頁)

注7 注6に同じ

注8 お延と清子は対照的に描かれることが多い。その点について山本勝正氏の次のような指摘がある。

「新調の纏袍」がお延を、「宿の纏袍」が清子を意味していることは明らかである。津田が宿の纏袍を着ていたこと、また宿の方が上等であると思うことは、津田の気持ちがいかに清子に魅かれてゐるかをあらわしているといえよう。

(「『明暗』論―津田の温泉行きの意味―」 山本勝正著『夏目漱石文芸の研究』 桜楓社 平元・6 267頁)

津田が、実際に用例①②の「電燈」に照らされていたお延の姿を見て、用例②の回想のお延を「電燈」の下に描き、想像の清子の姿を用例⑥の「電燈」の下に見たのちに、実際の清子の姿を用例⑨の「電燈」の下に見るということは、この順番も意識的に描かれたと考えることができるのではないだろうか。津田の前に清子が実際に登場し、それまで共に居たお延は、今では離れ

たところにおり、二人の女性の交代を表しているとも考えられる。お延がこの後どのような行動を取るに至ったかについてはさだかではない。